

1. 活動報告（事務局 記）

- 3月7日（日）会員13名が参加し、丸太橋の補強、湿地帯護岸の補修、竹林内の倒竹除去および焼却、東屋横、草木焼却場の整地、湿地帯の除草の作業を実施しました。作業の前には、原田会長から水車回転軸へのグリス注入方法を教わりました。グリス注入は、平日は地元会員、活動日は地元以外の会員が行います。
- 3月10日・13日駐車場の土手残枯草の刈り取りと焼却を原田会長・吉富会員と会員外の岡崎さん・長岡さんで行いました。
- 3月21日（日）会員16名が参加し、湿地帯の除草、竹林の整備、駐車場および観察路の草刈り、倒木(杉)の処理、除去草の処理、田圃から止水池へ下りる階段の整備の作業を実施しました。午後からは会計監査を実施し、監査役の承認をいただきました。また役員会議を開催し、総会報告の最終案をまとめました。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎行事

- 4月4日（日）令和3年度「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」総会
- 4月17日（土）親子自然観察隊（結隊式・野草観察）外部講師招聘

3. 来訪者の声

今回はありません。

4. 会員の声 【桜と入学式】（原田満洲夫 記）

十数年前二俣瀬小学校の新しく転入された先生が、入学式の時「厚東川の土手の桜が満開で大変な歓迎を受けた」と云われ大変印象深かった。

ところが今年は3月17日に広島をはじめ四国高知・松山・さらに鹿児島・東京と既に開花宣言を發した。満開も、散るのも4月までもたないだろう。地球温暖化によるものかどうかは、よくわからないが天候が少しずつ異常な方向に行っているようだ。

今日19日は二俣瀬小学校の卒業式である。それもわずか5名である。厚東川土手も今年は無理であるがいつか近い将来卒業式に桜の満開で卒業生を送ることが出来るようになるか？それとも少子化の為卒業生が居ない状況になるか？

自然環境教育の場を維持管理している我々の活動は重大な責任を感じる！

5. ビオトープ関連：「山口県の昆虫たち」 (管 哲郎 記)

(61) ヒナカマキリ *Amantis nawai* カマキリ科

体長 12～15mm、小さな小さなカマキリです。沿岸部の樹林帯に生息するとされています。8月～11月ごろに見られます。翅は退化しているようで魚のウロコのように小さいので、飛べないのではないかと思います。まるでクロオオアリが歩いているようで、枯れ葉の上などを歩いても気が付かないほどです。日本では一番小さなカマキリのように、木の茂みや草むらの中などに隠れており、まず気づくこともなく、一般の人々の眼には触れないので、こんなカマキリがいたとは思わないでしょう。

筆者もたまたま偶然に公園の遊歩道で見つけました。アスファルト舗装の歩道上にいる、黒い大きな”アリ”“と誤っており、最初は全く気にしていませんでしたが、アリにしては動きがなく不思議に思い近づいて観察しますと、このカマキリでした。昆虫を研究している仲間より、このカマキリことは聞いており、いつかは出会いたいものだと思っていましたので、見つけたときには感激でした。

すぐに近くの葉の上に上ったので、大急ぎで撮影したのですが、標本にしようと思いましたが、残念ながら葉裏に逃げられたのちに見失ってしまいました、思った以上にすばしこいカマキリでした。あとで仲間に聞いてみると、捕まえるには昆虫を捜すときに用いる「たたき網」を使い葉や枝を棒でたたいて受け皿に落とし込む方法が良いとのことでした。

小さなカマキリとして”コカマキリ””ヒメカマキリ”がいます、大きさを比べてみましょう、写真で示しておきます、参考にしてください。尚、草刈りをした後などでも探すと見つけられるようです、秋になったら気を付けておくと案外見つかるかも！

参考文献

槐 真史ほか、2017. ポケット図鑑日本の昆虫 1400

① チョウ・バッタ・セミ、319pp, (株)文一総合出版、東京

福田晴夫ほか、2005. 昆虫図鑑 採集と標本の作り方、236pp, (株)南方社、鹿児島



実物大のヒナカマキリ



実物大のヒメカマキリ



ヒナカマキリ



コカマキリ

6. 会よりの連絡事項

- 1) 4月4日の総会は、二俣瀬ふれあいセンターにて行います。マスク着用・手の消毒など新型コロナの対策に協力をお願いします。

7. 編集後記 (中本 亜矢子 記)

毎月発行される会報が今回で236号になる。第1号は2001年5月23日。担当の西原さんの手によって毎月発行され続け、今回で236号に至る。ホームページは若林さんが管理されていて、会報の1号から最新号まで、全部見ることができる。Facebookを開けば、毎回の活動の様子をバランスよく撮影し、端的な言葉で説明書きが添えてある。20年もの長きにわたってつくる会の活動を記録し、その後も見やすいように整理してくださっていることに感謝したい。創生期からの会員は皆20歳の加齢を経た。当時50代の会員は70代だ。さぞかし作業が堪えることと思う。それでも皆でアイデアを出しながら、傷んだ場所の修理やエコアップなどを続けている。カエルの卵やツクシボウ、ビオトープの生き物たちに癒されながら。今年もまたビオトープに春が来た。